



第26回 宝塚混声合唱団音楽会

Joseph Haydn

オラトリオ

「四季」

Hob. XXI:3

字幕付き

2014年8月24日(日)

西宮市民会館アミティホール

開場 PM 1:30 開演 PM 2:00

後援: 宝塚市・伊丹市・西宮市・宝塚市教育委員会・宝塚市文化財団
宝塚合唱連盟・兵庫県合唱連盟

ごあいさつ

本日は、私たち宝塚混声合唱団の第26回音楽会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

宝塚混声合唱団は、昨年8月に畑 儀文先生を新しく指導者にお迎えし、35年に亘る経験と財産を糧に、先生のユーモアを交えた熱いご指導のもと、気持ち新たに歩み始めました。

今回は、ハイドンの2大オラトリオのひとつ「四季」に取り組んでまいりました。様々な生の歓びや表情豊かな自然描写を、皆さまにお届けできれば、これほどの喜びはありません。

最後までごゆっくりご鑑賞いただくとともに、今後とも宝塚混声合唱団の活動にご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2014年8月 宝塚混声合唱団

私たちは、昨年夏、幸運にも畑先生を指揮者としてお迎えすることができました。
篠山生まれの先生が、宝塚や武庫川への思いと共に団員に寄せて下さったメッセージを掲載します。
昨年来、あつのご指導に一同心酔し本日を迎えましたが、このメッセージは今も新鮮に響きます。
(機関誌 Purple Echo 2013年8月 No.371 より再録：音楽会運営部)

Message

伝統ある“宝塚混声合唱団”の皆さん！故郷篠山を離れ40年が過ぎた今、思いがけず与えられた皆さんとの出会いに心より感謝いたします。私にとって宝塚は、高校時代篠山から神戸まで声楽のレッスンに通う時、国鉄と阪急を乗り換えた街、伯父が住んでいた街、そしておしゃれな歌劇の街でした。その思い出と憧れの街宝塚で、こよなく音楽を愛する皆さんと一緒に古今の名曲を味わうことができる。

本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。

さて、宝塚を流れる武庫川は源を篠山に発する川ですが、数年前私はその河口西宮浜から篠山まで全長66キロを、堤を辿り3日かけて歩いたことがあります。宝塚、西宮を流れる見慣れたその様子と、中流、上流のそれとは同じ川とは思えないものでした。

私たちが取り組む楽曲の持つ長い時の流れを思うと、気が遠くなり、めまいすら感じます。

私たちの演奏は、小さな支流かも知れません。或いは氾濫して土手からあふれ出る流れになるかも知れません。

淀みにだけはなりたくありません。“自分の足で歩いて源流を辿る”音楽に携わる私のモットーです。皆さんも私と一緒に歩いてくださると嬉しいのですが。

畑 儀文



第25回音楽会『J.S.BACH ヨハネ受難曲』2013年7月27日(いたみホール)

Program

Joseph Haydn

オラトリオ「四季」

Hob. XXI:3 字幕付き

指揮 畑 儀文

独唱 辻井 亜季穂 (ソプラノ) ハンネ
松原 友 (テノール) ルーカス
篠部 信宏 (バス) シモン

オーケストラ アンサンブル・ムジカ・アニマ

Violin-1	釋 伸司	松本 紗希	寺西 一巳	
	山田 優子	嵯峨山 庸子	三浦 裕梨香	
Violin-2	増永 花恵	平井 誠	伊左治 道生	
	山邊 亮子	小山 亜希		
Viola	上野 博孝	上野 亮子	三上 哲	山口 規子
Violoncello	上塚 憲一	土井 真理	尾崎 達哉	玉田 陽子
Contrabass	田中 寿代	土屋 綾子		
Flute	平岡 洋子	門野 満里		
Oboe	松本 剛	中村 希		
Clarinet	李 胎蓮	池松 郁		
Fagott	前田 肇	錦織 景子	松本 静香	
Horn	伏見 浩子	奥祐 里恵		
Trumpet	秋月 孝之	中尾 友紀		
Trombone	中村 洋行	ロイド 高本	今田 孝一	
Timpani	安永 早絵子			
Percussion	大串 明子	小泉 渚		
Fortepiano	バブロ・エスカンデ			

字幕 藤野 明子



第1部 春

- | | | |
|-----|---------------------------|---------------------|
| 第1曲 | 序奏とレチタティーヴォ（シモン、ルーカス、ハンネ） | 「見よ、厳しい冬も」 |
| 第2曲 | 合唱（村人たちの合唱） | 「来い、のどかな春よ」 |
| 第3曲 | レチタティーヴォ（シモン） | 「天の牡羊座から、今」 |
| 第4曲 | アリア（シモン） | 「農夫は今、喜び勇んで」 |
| 第5曲 | レチタティーヴォ（ルーカス） | 「農夫は今、骨惜しみせず」 |
| 第6曲 | 三重唱と合唱（祈りの歌） | 「慈悲深い天よ、恵みを与えてください」 |
| 第7曲 | レチタティーヴォ（ハンネ） | 「私たちの願いは聴き届けられました」 |
| 第8曲 | 三重唱と合唱（喜びの歌） | 「おお、今や何と素晴らしい」 |
| 第9曲 | 三重唱と合唱 | 「永遠にして力強く恵み深い神よ!」 |

第2部 夏

- | | | |
|------|------------------------|---------------------|
| 第10曲 | 序奏とレチタティーヴォ（ルーカス、シモン） | 「灰色のヴェールに包まれて」 |
| 第11曲 | アリア（シモン） | 「眠りを覚ました羊飼いは今」 |
| | レチタティーヴォ（ハンネ） | 「朝焼けが訪れて」 |
| 第12曲 | 三重唱と合唱 | 「太陽が昇る」 |
| 第13曲 | レチタティーヴォ（シモン、ルーカス） | 「今、まわりの全てのものが活動を始め」 |
| 第14曲 | カヴァティーナ*（ルーカス） | 「自然は、重圧にあえいでいる」 |
| 第15曲 | レチタティーヴォ（ハンネ） | 「さあ、暗い森にきました」 |
| 第16曲 | アリア（ハンネ） | 「何という爽やかな感じでしょう!」 |
| 第17曲 | レチタティーヴォ（シモン、ルーカス、ハンネ） | 「おお見よ!蒸し暑い空気の中で」 |
| 第18曲 | 合唱 | 「ああ、嵐が近づいた!」 |
| 第19曲 | 三重唱と合唱 | 「黒い雲は切れ」 |

*アリアほど装飾的でなく、リート的な性格の曲

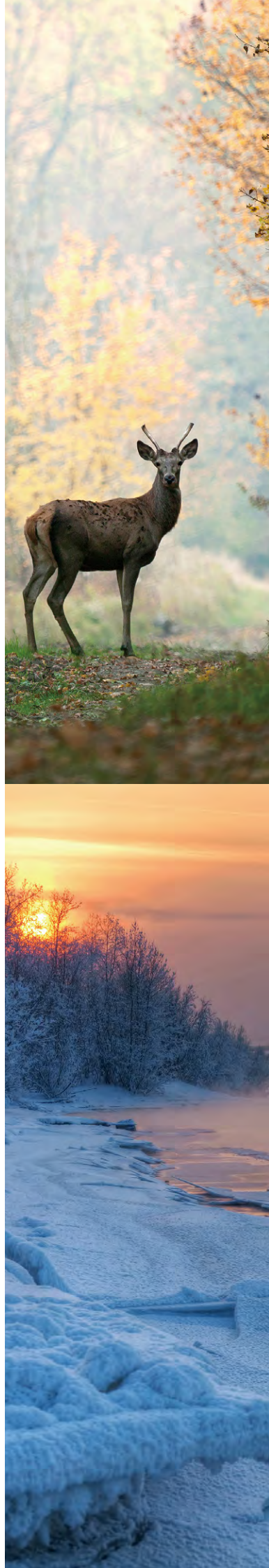


第3部 秋

- | | | |
|------|------------------------|------------------------|
| 第20曲 | 序奏とレチタティーヴォ（ハンネ） | 「はじめ、春が」 |
| 第21曲 | レチタティーヴォ（ルーカス、シモン） | 「農夫は今、車にうず高く積みあげられた」 |
| 第22曲 | 三重唱と合唱 | 「こんなに自然は、勤労に報いてくれた」 |
| 第23曲 | レチタティーヴォ（ハンネ、シモン、ルーカス） | 「ごらんさい、あそこのハシバミの茂みの方へ」 |
| 第24曲 | 二重唱（ルーカス、ハンネ） | 「町から来た美しい人、こちらへおいで!」 |
| 第25曲 | レチタティーヴォ（シモン） | 「今、土がむき出しになった畑に」 |
| 第26曲 | アリア（シモン） | 「広い草原を見渡してごらん!」 |
| 第27曲 | レチタティーヴォ（ルーカス） | 「ここで、野兔をねぐらから」 |
| 第28曲 | 合唱（農民と狩人の合唱） | 「聞け、この大きなざわめきを」 |
| 第29曲 | レチタティーヴォ（ハンネ、シモン、ルーカス） | 「ぶどうの樹には、今」 |
| 第30曲 | 合唱 | 「万歳、万歳!ぶどう酒だ」 |

第4部 冬

- | | | |
|------|------------------------|---------------------|
| 第31曲 | 序奏とレチタティーヴォ（ハンネ） | 「今、色あせた年が幕を下ろし」 |
| 第32曲 | カヴァティーナ（ハンネ） | 「光と命は衰え」 |
| 第33曲 | レチタティーヴォ（ルーカス） | 「広い湖も凍りつき」 |
| 第34曲 | アリア（ルーカス） | 「旅人が今ここで」 |
| 第35曲 | レチタティーヴォ（ルーカス、ハンネ、シモン） | 「そこで旅人が近づいてみると」 |
| 第36曲 | ソプラノソロと合唱（糸車の歌） | 「くるくる回れ」 |
| 第37曲 | レチタティーヴォ（ルーカス） | 「亜麻布を紡ぎ終わって」 |
| 第38曲 | リート（ハンネ）と合唱（おとぎ話） | 「ある時、名誉を重んずる娘が」 |
| 第39曲 | レチタティーヴォ（シモン） | 「乾燥した東の方から」 |
| 第40曲 | アリアとレチタティーヴォ（シモン） | 「これを見るがよい、惑わされた人間よ」 |
| 第41曲 | 三重唱と二重合唱 | 「それから、大いなる朝がやってきた」 |





ハイドン オラトリオ「四季」解説

1. ハイドン略伝

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809年)は、女帝マリア・テレジアとその息子ヨーゼフ2世治世下のオーストリアが絶対主義社会から市民社会へと大きく移行して行く時代に、宮廷音楽家として、そして市民音楽の形成者として、100を超える交響曲、80曲余の弦楽四重奏曲、さらに「天地創造」、「四季」の2大オラトリオを生み出したウィーン古典派音楽の巨匠です。

ハイドンは1732年にウィーンの東方の小村ローラウで、音楽好きの車大工の息子として生まれました。弟のミハエルも作曲家として名をなしたように、幼児の頃から音楽的素質にめぐまれ、8歳のときにウィーンに出てシュテファン教会の少年合唱隊(いまのウィーン少年合唱団)に加入了。10年後に声変わりで合唱隊を去ってからは、貧窮のなかで屋根裏部屋に住んで貴族の子女の音楽の家庭教師を勤めたりしながら、独学で作曲や楽器演奏の腕を磨きました。

1761年にハンガリー貴族のエステルハーヅ家に召し抱えられ、アイゼンシュタットに赴任して楽長として滞在、楽団のために多くの弦楽四重奏曲や交響曲を作曲して年々盛名が高まりました。＜パパ・ハイドン＞の愛称で呼ばれたようにハイドンは温厚で礼儀正しく、生涯を通じて敬虔なカトリック信者でしたが、唯一の不幸は年上で音楽を理解しない女性M・アンナと結婚したことです。二人は子供にめぐまれないまま添い遂げましたが、美しい年下のイタリア人女性歌手L・ボルツェリがハイドンに“愛の彩り”を与えたと伝えられています。

1790年、エステルハーヅ公の死去に伴う楽団の解散によってウィーンに戻ったハイドンは、音楽興行師ザロモン・ザ・ロンドンという生活を送りました。音楽が市民の間で広く享受されるようになっていたイギリスでは次々に演奏会での指揮や新作の演奏を求められ、名声と富を得てオクスフォード大学から名誉博士号を授与されました。交響曲「驚愕」「軍隊」「時計」、弦楽四重奏曲「ひばり」「皇帝」など有名な曲は主としてこの時期に作られました。ちなみに「皇帝」は英国国歌に着想を得て作られ、その荘重な旋律はオーストリア国歌を経て現在ドイツ国歌として歌い継がれています。

1795年にウィーンに帰ったハイドンは市内のゲンペンドルフに居をかまえ、ロンドン滞在中に聴いたヘンデルの「メサイア」に刺激を受けて、傑作オラトリオ「天地創造」と「四季」を書き、1809年にナポレオンのフランス軍が二度目に侵入した直後に老衰のため77歳の生涯を終えました。ハイドンの葬送はショッテン教会で行われ、集まったウィーンの市民たちはモーツァルトの「レクイエム」を歌って追悼しました。葬儀には若きスタンダードがナポレオン軍の一員として参列しています。

2. 「四季」の成りたち

ハイドンは晩年、全芸術性を総合した声楽曲の作曲に力を注ぎ、オラトリオ「天地創造」(1798年)と「四季」(1801年)を完成しました。いずれも友人のスヴィーテン男爵が英詩から翻案したドイツ語の台本によるもので、「天地創造」はJ・ミルトンの長詩＜Paradise Lost＞にもとづく創造主とエデンの園の物語、いっぽう「四季」はJ・トムソン(スコットランドの詩人：1700～1748年)の長詩＜The Seasons＞を土台とした人間たちの現世での農耕生活をテーマにしています。

「四季」の初演(1801年5月)に際して、ハイドンは“「天地創造」では＜天使＞が歌ったが、「四季」では＜農夫＞が歌う”と曲の特徴を端的に語っております。＜Die Jahreszeiten＞の名の示すとおり、この曲は春の農作業、夏の嵐、秋の収穫、冬の手仕事など自然の移り行きと人々の営みを田園風俗画のように優美に描き出すとともに、自然と人間の共生を願う思念が一貫して流れており、ハイドンが到達した音楽芸術の力強さ、豊かさ、普遍性を遺憾なく発揮していると言えるでしょう。

曲は「春」、「夏」、「秋」、「冬」の4部に分れ、オーストリアの農村を舞台として、オーケストラ、3人のソリスト(農夫シモン＝バス、その娘ハンネ＝ソプラノ、若者ルーカス＝テノール)そして混声4部合唱で構成されており、各部ともソロが物語る叙唱(レチタティーヴォ)をアリアと合唱が肉付けしフーガで高揚させて行く運びになっています。

曲数は各部の序奏を含め4部全曲で合計41曲となっています。



3. 「四季」の内容

第1部 「春」 9曲(1～9)

厳しい冬から春への推移を描く序奏(1)に始まり、3人のソロが冬の終わりと春の到来を告げると、牧歌的な合唱「来い、のどかな春よ」(2)が続きます。さらにシモンの種蒔きのアリアの場面で交響曲第94番「驚愕」の第2楽章のよく知られた旋律が流れてきます(4)。次いで、ホルンに導かれた3人のソロと村人たちのおだやかな祈りの合唱「慈悲深い天よ」が後半に入って力強いフーガへと発展して行きます(6)。ハンネの叙唱「私たちの願いは聴き届けられました」(7)にルーカスがうなずき合唱がこれに答えて「おお、今や何と素晴らしい」と歌の輪を上げ(8)、シモンも加わって大合唱となり、神の栄光を称える堂々たるフーガで「春」は締めくくられます(9)。

第2部 「夏」 10曲(10～19)

夜明けを表わす短い序奏に続き、朝の到来を告げるルーカスとシモンの叙唱(10)、羊飼いの始動と朝焼けを歌うシモン、ハンネのアリアと叙唱(11)に続き、昇りゆく太陽を音階の上行で描写する三重唱に合唱が加わり、讃歌「太陽が昇る」へと高揚して行きます(12)。さらに、シモンとルーカスが暑さに喘ぐ自然の姿を交互に語ると(13,14)、ハンネが対照的に夏の清々しさを歌います(15,16)。次いで、嵐の到来を3人のソロが語ると(17)、嵐におののく村人たちの合唱となりフーガを交えながら豪雨と雷鳴の激しさを舞台いっぱいに轟かせます(18)。やがて嵐は去り3人のソロが夕べの田園の風景を歌い、家路につく村人たちの明るい合唱で「夏」は結ばれます(19)。

第3部 「秋」 11曲(20～30)

豊作の秋の喜びを表わす序奏と3人の叙唱(20,21)に続き、三重唱で実りの源である＜勤労＞を讃えると、合唱が加わってフーガへと発展し「こんなに自然は、勤労に報いてくれた」と高らかに歌います(22)。

場面は移って、果樹園で戯れる恋人たちに目をやる3人の語り合い(23)に続いてルーカスがハンネに恋心を打ち明け、2人は魅惑的な愛の二重唱を歌います(24)。次は狩の場面へ。シモンが畑を荒らす野兎の大群について語り(25)、ルーカスがこれを迎え撃つ獵犬と狩人の動きを

語り(26)、角笛の響きの中で追われる鹿、追う人が加わり村人と狩人が力強く“ハラーリ!”と叫ぶ勝利の合唱に高まって行きます(27,28)。そして最後は葡萄酒の祭り。葡萄酒作りの様子を3人が交々に語り(29)、“ユーヘ!”と唱える掛け声とともに酒宴となつてにぎやかに踊り騒ぐ村人の合唱は力強いフーガとなり、打楽器も加わり歓喜のうちに「秋」は終わります(30)。

第4部 「冬」 11曲(31～41)

冬の到来を知らせる序奏を受けて、シモンとハンネが陰鬱な冬について語り(31)、ハンネが暗い夜と荒涼とした自然を切々と歌います(32,33)。続いてルーカスが吹雪の荒野の中で迷った旅人がやっと小屋の灯を見つける情景を歌い(34)、3人のソロが小屋の中の家族団欒と手仕事の様子を語ります(35)。そしてハンネと女声合唱が「くるくる回れ」と素朴な糸車の歌を歌い、男声も加わります(36)。さらにハンネが賢い娘と愚かな貴族の小唄をユーモラスに歌い＜笑い＞の合唱が続きます(38)。シモンが再び冬の厳しさについて語り(39)、＜美德＞を称える厳粛なアリアを歌うと(40)、突如ファンファーレが鳴り、天国の門が開かれ、三重唱と二重合唱が交互に神の導きを求める壮麗な終曲を展開、これが大フーガと高らかなアーメンとなって全曲が輝かしく閉じられます(41)。

昨年8月に畑 儀文先生を指揮者にお迎えし、宝塚混声合唱団としては結成以来四半世紀を越える歴史のなかで、初めてハイドン、それも畢生の大作「四季」の練習に取り組んでちょうど＜四季＞をひと巡りして、本日記念すべき舞台を迎えることができました。

ソリスト、オーケストラと力を合わせ、優しさと情感と絵画性に溢れ、力強く崇高で深い思想性を持つオラトリオを声高らかに歌い上げ、会場の皆さまと“こころ”をひとつにしたいと願っております。

(参考文献):

「ハイドン」(スタンダード 大岡昇平訳 創元社)、
「新版 ハイドン」(大宮真琴 音楽之友社)、
「ハイドン」(M・ヴィニャル 岩見至訳 音楽之友社)、
「音楽と市民革命」(松田智雄 岩波書店) ほか

(テノール 福田 伸)

Profile

指揮者

畑 儀文

はた よしふみ



photo:Eiji Shinohara

兵庫県篠山市生まれ。大阪音楽大学大学院修了。

1979年大阪にて、小林道夫氏の伴奏による初リサイタルを行う。以後テノールソリストとして、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団ホルン奏者ペーター・ダム氏との共演、イエルク・デームス氏の伴奏による数多くのリサイタル等で大きな成果をおさめた。

1991年オランダ・アムステルダムにおいて、バロック歌手として高名なマックス・ファン・エグモント氏のもとで研鑽を積む。以後オランダ各地において、受難週には、エヴァンゲリストとして招かれ、近年はドイツ・ライプツィヒにおいてバッハ作品のソロを務める。

また1993年～1999年にかけて、シューベルト歌曲全曲演奏を成し遂げ、国内外で話題を集めた。

日本コロムビアからCD「日本のうた」「新しい日本のうた」「トスティ歌曲集」「昭和のうた」「美しき水車小屋の娘」をリリースし、その天性の歌声はジャンルを問わず心に響く感動を呼び、注目を集めている。

「大阪文化祭本賞」「咲くやこの花賞」「大阪府民劇場賞」「坂井時忠音楽賞」「兵庫県芸術奨励賞」「兵庫県文化賞」等多数の賞を受賞。

丹波の森国際音楽祭シューベルトティアードたんば音楽監督。京都女子大学非常勤講師。

ソプラノ

辻井 亜季穂

つじい あきほ



大阪府立夕陽丘高等学校音楽科、愛知県立芸術大学音楽学部を経て、同大学院音楽研究科博士前期課程を首席で修了。中村桃子賞、優秀学生賞受賞。

第5回長久手国際オペラ声楽コンクールにて、特別賞を最年少で受賞の他、第63回全日本学生音楽コンクール全国大会声楽部門大学・一般の部（第2位）、第19回丹羽奨励生（大幸財団）受賞。

2011年DAAD（ドイツ学術交流会）ドイツ政府給費留学生として渡独し、2014年1月ライプツィヒ演劇音楽大学大学院オペラ科修了。

第12回Albert Lortzingコンクール（ライプツィヒライオンズクラブ主催）優勝。2014年、第11回モーツァルト国際コンクール（ザルツブルク）ファイナリスト、第33回国際ハンス・ガボアベルヴェデーレ声楽コンクールファイナリスト（複数の特別賞受賞）。

現在、テューリンゲン州オペラ研修所研修生として、ワイマール歌劇場、エアフルト歌劇場、ゲラ歌劇場の公演に出演の他、ライプツィヒ歌劇場での公演にも客演。

2014年9月より、アルテンブルク・ゲラ歌劇場にソロ専属歌手として所属、バラの騎士ゾフィー役でのデビューを控えている。

これまでに声楽を河邊敦子氏、大下久深子教授、Prof. Dr. Jeanette Favaro-Reuter氏、Prof. Hans-Joachim Beyer氏に師事。

チェロ

上塚 憲一 かみづか けんいち

京都市立芸術大学卒業。チェロを黒沼俊夫、A.ピルスマ、室内楽をG.ボッセ、S.スタンディジの各氏に師事。大阪文化祭奨励賞、灘ライオンズクラブ賞、坂井時忠音楽賞を受賞。大阪音楽大学教授、同大学附属音楽院講師、西宮高等学校音楽科非常勤講師。チェロアンサンブル“エクラ”、Baroque Ensemble VOC、アンサンブル・ムジカ・アニマ主宰。西宮音楽協会会員。

バイオリン

釋 伸司 しゃく しんじ

京都市立芸術大学卒業。元テレマン室内管弦楽団コンサートマスター。現在は、いずみシンフォニエッタ大阪、マイハート弦楽四重奏団メンバー。京都フィルハーモニー室内合奏団客演コンサートマスター。室内アンサンブル・アッサンブラージュを主宰し、ホール主催公演、学校公演レコーディングなど幅広く活躍している。



テノール

松原 友

まつばら とも



大阪府立夕陽丘高校音楽科を経て、東京藝術大学卒業。同大学大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学を卒業。

これまでヨーロッパ及び日本の各地において数々のリサイタル、オラトリオの公演に出演し、ミュンヘン放送管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団等のオーケストラと共演。

サイトウキネンフェスティバルにおいて小澤征爾氏と共演した他、ミュンヘン・プリンツレゲンテン劇場、関西二期会等のオペラ公演に携わる。

第81回日本音楽コンクール第3位、岩谷賞（聴衆賞）、第14回松方音楽賞受賞。

同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪府立夕陽丘高校音楽科、各非常勤講師。関西二期会会員。

バス・バリトン

篠部 信宏

しのべ のぶひろ



photo:Emi Nakagawa

大阪芸術大学大学院修了。卒業時に学長賞受賞。第1回大阪国際音楽コンクール第3位受賞。2005年より毎年渡欧、オランダにてMax van Egmond氏のもとで研鑽を積んでいる。宗教曲のソリストとして関西、東京そして日本各地の合唱団に客演。バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「口短調ミサ」「クリスマスオラトリオ」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト、フォーレ、ブラームスの各「レクイエム」、ハイドン「四季」「天地創造」、メンデルスゾーン「エリヤ」「パウロ」、ベートーヴェン「第九」「荘厳ミサ」他多数のバスソロを務める。2009年丹波の森国際音楽祭のシンボルアーティスト。リートでは07年小林道夫氏を迎えシューベルト「白鳥の歌」全曲リサイタル、10年オランダにてPablo Escande氏とシューマン「詩人の恋」全曲他のリサイタルにて好評を博す。現在、シノベムジカアカデミー代表、京都バッハゾリストン所属、フィルハーモニーカンマーアンサンブルメンバー、日本テレマン協会ソリスト、京都女子大学非常勤講師。

オーケストラ

アンサンブル・ムジカ・アニマ

2006年上塚憲一を中心に発足したオーケストラで、主に関西で活躍する経験と実力豊かな演奏家を中心に構成される。個々の演奏家のレベルの高さから、時代考証に基づいた正統派の演奏を目指す完成度の高いオーケストラで、バロックから近代の合唱作品での演奏は共演した各方面より高い評価を得ている。



【ハイドンの生家1】

フランツ・ヨーゼフ・ハイドンは、1732年にオーストリアの東端のローラウ (Rohrau) で生まれた。ハイドンの生家は、火事で焼失後もとの形に再建され、現在はハイドン博物館になっている。



【ハイドンの生家2】

博物館の入口には、ハイドンの弟で作曲家のミハエル・ハイドンも1737年にこの家で生まれたことが記されている。



【アイゼンシュタット／エステルハージ (Esterházy) 宮殿】

ウィーンから南東へ約50km、ハンガリー国境近くのブルゲンラント州にあるアイゼンシュタットにあるバロック風の宮殿。ハイドンはエステルハージ家に1790年(58歳)までの約30年間仕え、ここで数々の名作が生まれた。ハイドンの遺体は同市内の墓地に葬られている。



【フェルテド／エステルハージ宮殿】

ハンガリー西部に位置する町フェルテドにあるエステルハージ宮殿。ウィーンのシェーンブルン宮殿を模したともいわれる。交響曲第45番「告别」のエピソードで有名。



【ウィーン2】

1795年にロンドンから戻ったハイドンは、「天地創造」、「四季」等の名作を残し、ナポレオン戦争中の1809年に77歳で世を去った。19世紀に入り音楽の市民化が進み、音楽の都の象徴であるオペラ座は1869年に完成。

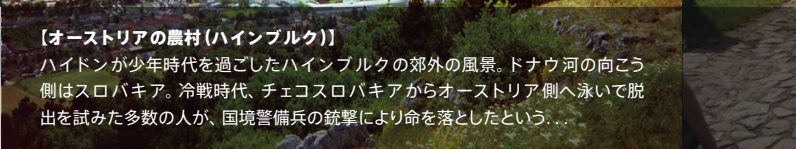


ハイドン写真館

昨年のヨハネ BACH 写真館に続き、四季ハイドン写真館で、しばしおくるぎください。
写真・文は、バス 大隅氏にお願いしました。(音楽会運営部)



【ぶどう (チロルの農村)】



【オーストリアの農村 (ハインブルク)】

ハイドンが少年時代を過ごしたハインブルクの郊外の風景。ドナウ河の向こう側はスロバキア。冷戦時代、チェコスロバキアからオーストリア側へ泳いで脱出を試みた多数の人が、国境警備兵の銃撃により命を落としたという...



【水車 (中部ドイツの農村)】

【雪景色 (ハンプルク郊外)】



【こうのとおり (ハンガリーの農村)】



【ハインブルク】

ハイドンは1738年(6歳)にハインブルク(Hainburg)に住む教会の聖歌隊長を務める叔父の所に預けられた。ハインブルクはローラウから14kmほど離れたドナウ河畔にある。現在ではスロバキアとの国境の町で、スロバキアの首都ブラチスラバ(Bratislava)までは目と鼻の先。



【ロンドン/ロイヤル・アルバート・ホール】

ハイドンは1790年(当時58歳)に渡英、1795年まで数度長期滞在。プロムスで有名なこのホールでは、「四季」も度々演奏される。当地で、「四季」の詩の原作者J.トムソンは、プロムス最終日の演目「ルール・ブリタニア」の作詞者としての方が有名か。



【ウィーン1】

ハイドンは1740年(当時8歳)に首都ウィーンに行き、アイゼンシュタット(Eisenstadt)に移る1761年(29歳)までの約20年間をウィーンで過ごした。このウィーン時代の前半はシュテファン寺院で聖歌隊員として歌い、後半は作曲家としての本格的な修行を行った。



【しか(北ドイツの自然公園)】



【ハンガリーの農村(ホッローケ)】

ハンガリーの伝統家屋が残る世界遺産の村。



【ハンガリーの農村(モール)】

ハンガリー中西部に位置するワイン産地で有名な町モールの郊外の様子。ハイドンが仕えたエステルハージ家は、ハンガリー領側にも宮殿があり、ハンガリーはハイドンにとってもゆかりのある国。この町はハイドンとは直接関係がないが、ドイツ系移民の子孫も多く、当時の中欧の農村の雰囲気を残している。



【ハンガリーの古都(セーケシュフェーヘルヴァール)】

ハンガリーの最古の都で、中欧らしい町。